

8505

18276

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第141集

福岡市博多区那珂所在

那珂3414 → 365集

那珂八幡古墳

那珂遺跡群
6次
(8505)

昭和59・60年度の重要遺跡確認調査及び緊急調査概報



1986

那珂3414

365集

福岡市教育委員会

8505

序 文

本書に紹介する那珂八幡古墳は、いまや高層ビル化がすすむ博多駅南部の住宅地域に位置しています。ここ数年ようやく埋蔵文化財保護の立場から調査のメスが加えられるようになりましたが未だ充分とはいえません。

昭和46年、森貞次郎氏のご尽力によって、那珂八幡社の小丘が前方後円墳であることが解明されました。

今回の調査では、前方後円墳が癱形を呈した最も古い古墳の形態をとることが判明しました。又、第2主体部からは三角縁神獣鏡が出土するという学術上貴重な成果をもたらすことができました。

本書が、学術研究の場で、また市民各位の文化財に対する关心と保護に活用されることを希望します。なお調査にあたって、ご指導、ご助言をいただいた諸先生、関係各位、また心よく調査にご協力いただいた神社総代各位に深甚の謝意を表します。

昭和61年3月31日

福岡市教育委員会 教育長 佐藤 英郎

目 次

I.はじめに.....	1	V. 埋葬施設.....	12
II. 那珂八幡古墳の位置と歴史的環境.....	2	VI. 遺物.....	16
III. 調査の概要と経過.....	6	VII. おわりに.....	17
IV. 墳丘と周溝.....	8		
付編 福岡市博多区那珂八幡古墳出土の銅鏡に付着する織物、及び同じ鏡の鉢孔内に残る 織維束について.....			18

例 言

1. 本書は昭和59年～60年度に、福岡市教育委員会が国庫補助を受けて発掘調査を実施した那珂八幡古墳の調査概要である。
2. 本書に掲載する遺構実測図は、井沢洋一、米倉秀紀のはか宮井善郎、古野徳久、上井基司、池田祐司、田中光、中野純江、松本美保、前東いづみの作成による。
3. 本書に掲載する遺物実測図は谷沢仁が作成した。
4. 本書に掲載した遺構・遺物の整図は、池田洋子、深堀博子の手による。
5. 本書に掲載した写真の撮影は、井沢、米倉が行ない、焼付は黒岩三紀子による。
6. 本書の執筆は主として井沢が行ない、編集は谷沢、池田、深堀との協議のもとに井沢、米倉が担当した。

I. はじめに

調査に至る経過

那珂八幡古墳は、福岡市博多区那珂大字宮の脇1丁目44に所在し、後円部の頂上には那珂八幡社が奉られている。福岡平野のはば真中、低丘な那珂台地上に立地する古墳で、昭和40年代後半までは独立丘として見做されており、古墳と確認されるに至ったのは昭和46年である。

昭和23年に那珂八幡神社境内にて、銅戈鋌型が発見されたが、昭和46年、九州大学考古学研究室は森貞次郎氏の指導により銅戈鋌型の時期に合致する包含層、及び遺構を確認する目的で発掘調査を実施した。

調査の結果、当初の目的である鋌型と同時期の包含層は検出できなかったが、この独立丘が前方後円墳であることが確認された。周溝を巡らした帆立貝式の古式古墳として今日まで注目されるに至った。

那珂八幡古墳周辺は、元来、農村地帯であったが、福岡市南部の市街の拡大によって、閑静な住宅地として変貌してきた。近年の那珂八幡古墳周辺の開発は目ざましく、東側の筑紫通り（3号線バイパス）の沿線は高層ビル化が著しい。

国鉄竹下駅と那珂を結ぶ市道 那珂・竹下駅前線は那珂八幡古墳の墳丘上を通る計画である。近年、この計画が具体化しているため、福岡市教育委員会文化課は神社総代、及び地権者の間で協議を行なった結果、古墳の規模、及び範囲確認調査を実施するに至った。

今回の発掘調査は国庫補助の重要遺跡確認調査、及び緊急調査によるもので、期間は昭和60年3月12日～7月9日まで実施した。

調査の組織

調査主体 福岡市教育委員会

調査責任 福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課（旧文化課）

第2係 折尾学

調査庶務 第1係 松延好文

調査担当 第2係 井沢洋一、米倉秀紀

調査補助 宮井善郎、古野徳久、上井基司、池田祐司、田中光、中野純江、前東いづみ、松本美保、（九州大学考古学研究室）

整理補助 谷沢仁、池田洋子、深堀博子、山本久美

尚、調査にあたっては、森貞次郎（九州産業大学）、横山浩一、西谷正（九州大学）、白木原和美、甲元真之（熊本大学）、小川富士雄（北九州考古博物館）の諸先生、及び福岡県文化課の諸氏から御指導、御助言をいただいた。

又、廣田満氏、広田篤重氏、広田與三氏をはじめとする神社総代や町世話人の方々や、宮園地区の富永嘉則氏に多大な御援助を賜った。又、田中鉄雄氏には飲料水などを依頼した。

Ⅱ. 那珂八幡古墳の位置と歴史的環境

那珂八幡古墳は、福岡平野の中部、御笠川右岸の洪積台地に立地する。この那珂台地は、福岡平野を貫流する那珂川と御笠川の二大河川の開析によって形成された中位段丘のひとつである。この丘陵は阿蘇火砕流の白色粘土（八女粘土層）と黄褐色軽石質火山灰（烏納ローム層）で構成され、那珂から比恵にかけて広大な台地を形成している。標高は6～9mを測り、丘陵の東西幅は1km、南北の長さ2kmを測る。那珂八幡古墳はこの丘陵の北側に位置している。

那珂八幡古墳の周辺では、弥生～古墳時代に亘る集落や墓地群が濃密に形成されているが、特に那珂丘陵、及び三笠川左岸の麦野丘陵、板付、諸岡の独立丘陵上には旧石器時代から中世までの遺跡が連続して営まれている。東南約1.5kmの板付遺跡は東西150m、南北600mを測る独立丘陵で、弥生前期～後期の集落や墓地が形成されており、前期には集落を巡る環濠が形成される。田端遺跡では、甕棺墓から細形銅劍や銅鉢が出土した。この台地縁辺部では、绳文時代晩期から弥生時代前期の水利施設を有した水田跡が検出され、小海退期に形成された湿地を利用したものと考えられる。又、諸岡遺跡では甕棺墓から細形銅劍や朝鮮系無文土器が出土しており、注目される。那珂台地でも弥生時代前期初頭には春住遺跡や、中期から後期には比恵遺跡の集落と墓地が営まれる。比恵遺跡では溝で囲まれた環濠集落が鏡山猛、森貞次郎氏によって報告されているが、第2次調査検出の一辺約10mの環濠遺構は方形環濠墓と考えられる。^{註1} 又、南約2kmには弥生後期の鉄鍛を出土した井尻地神社遺跡や井尻甕棺墓遺跡がある。青銅器の鉄型の遺跡は板付遺跡（広形銅鉢）、那珂八幡古墳（中広銅戈）、井尻熊野櫻現付近遺跡（銅鉢）、五十川妙楽寺遺跡（銅鉢）が集中しており、奴国を構成する拠点的な集落の存在が伺える。

古墳時代には板付遺跡の集落や那珂深ツサ遺跡、三筑中学校遺跡などの水田遺構が知られている。古墳は石棺系石室を主体とする諸古古墳群や板付八幡古墳が知られ、中でも那珂八幡古墳は4世紀代の前方後円墳で、この地域に強大な勢力を誇っていた首長層の墓と思われる。又、那珂八幡古墳の北側には筑前国続風土記に記された劍冢古墳がある。主体部の横穴式石室には舟の線刻画を装飾している。全長60mの古墳で、6世紀後半代の築造と考えられる。又、歴史時代の遺構では比恵に那ノ津の屯倉が、那珂郡久には那珂郡家が比定されている。

註1 森貞次郎、岡崎高文「福岡県板付遺跡」「日本農耕文化の生成」 1961年

註2 中山平次郎「銅鍛・銅劍の新資料（板付北崎の遺物）」「考古学雑誌第7巻7号」 1917年

註3 福岡市教育委員会「板付周辺地形調査報告」（11～19）福岡市埋蔵文化財調査報告書 第29・31・36・38・49・57・65・83・98集 1972～1983年

註4 福岡市教育委員会「比恵遺跡、第6次調査遺構報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第94集 1983年

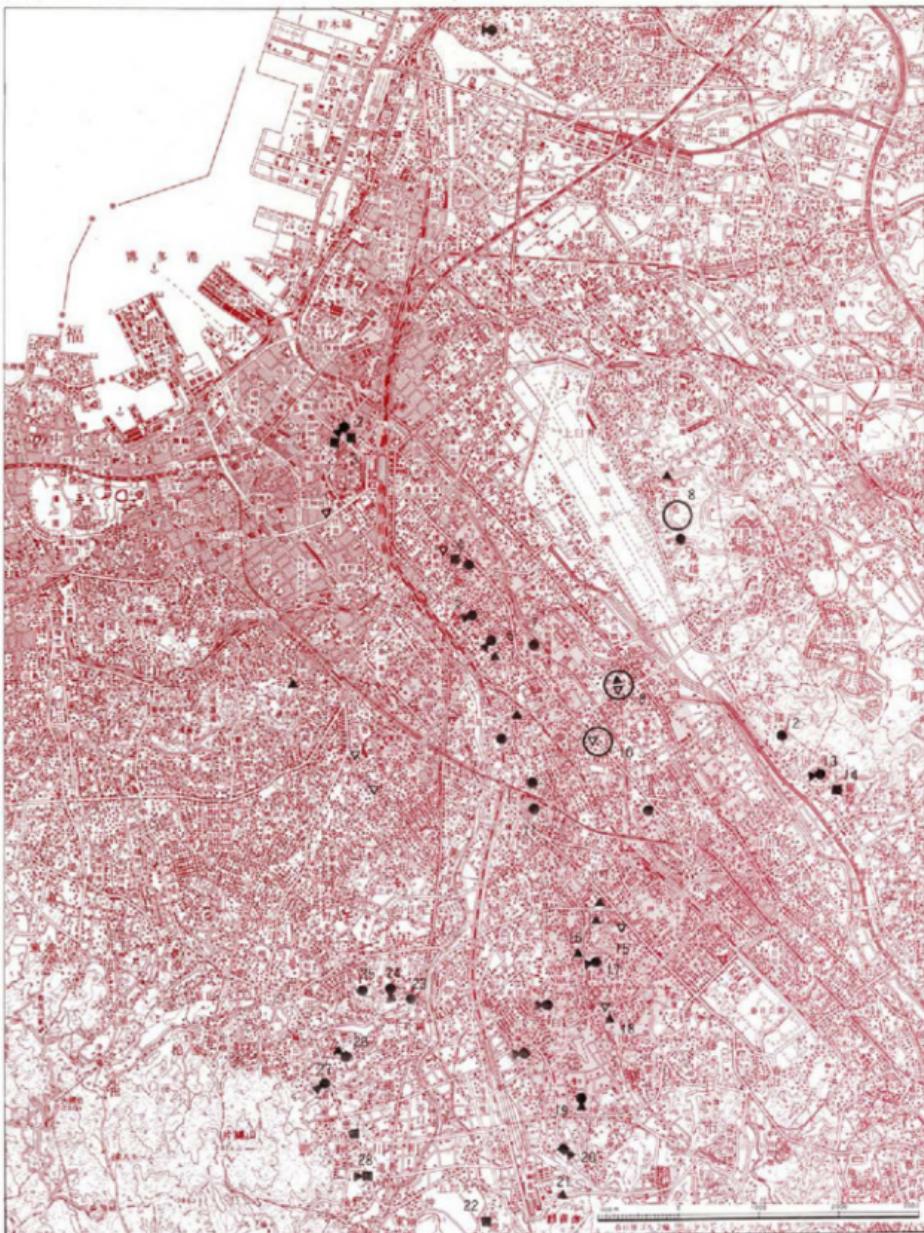
註5 原田大六「日本古墳文化一枚図」 1954年

註6 中山平次郎「井尻の弥生時代遺跡」考古学雑誌 第14巻第12号 1924年

註7 中山平次郎「劍冢館の新資料」史前学雑誌 第1巻第3号 1929年

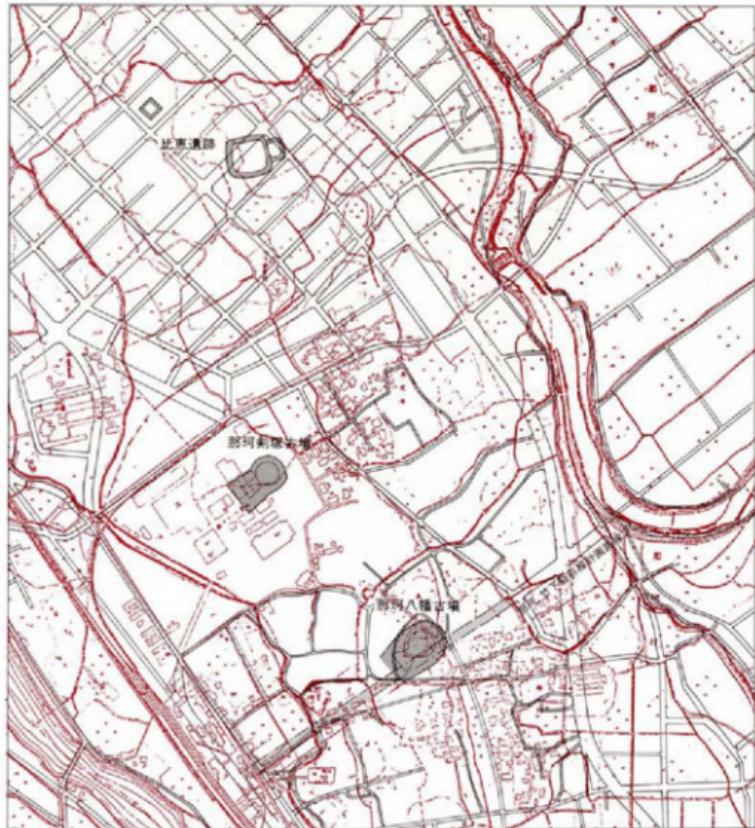
註8 福岡市教育委員会「那珂深ツサ遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第72・82集 1981, 1982年

註9 福岡市教育委員会「三筑遺跡、次郎丸高石遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第69集 1981年



周辺遺跡分布図 (縮尺1/70,000)

- 前方後円墳
 - 前方後方墳
 - 方形周溝墓他
 - ▲ 青銅器塔瓦出土地
 - ▽ 青銅器出土地
 - その他の遺跡
- | | | | |
|------------|------------|----------------|-------------|
| 1. 名島古墳 | 9. 板付遺跡 | 17. 竹ヶ本古墳 | 25. 卵内尺古墳 |
| 2. 博多一号墳 | 10. 諸岡遺跡 | 18. 大南遺跡 | 26. 萩ノ田4号古墳 |
| 3. 博多遺跡 | 11. 井尻遺跡 | 19. 天神山古墳 | 27. 小丸1号墳 |
| 4. 比恵遺跡 | 12. 金隈遺跡 | 20. ウロ古墳 | 28. 妙法寺2号墳 |
| 5. 那珂八幡古墳 | 13. 今里大塚古墳 | 21. 觀音山中厚I-1号墳 | |
| 6. 那珂深タサ遺跡 | 14. 御陵古墳 | 22. 灰焼古墳群 | |
| 7. 那珂深タサ遺跡 | 15. 須砍岡本遺跡 | 23. 老松神社古墳群 | |
| | 16. 赤井手遺跡 | 24. 老司古墳 | |



那珂八幡古墳周辺の旧地形図(縮尺1/10,000)

(付録)

廣島縣圖成「筑前國統風土記附錄」
加藤・鶴
那珂村　此村の事本編(二二八)に詳述。

八幡宮　神祇三間社・五日・奉祀梅林・石鳥居一基。
村の西ミヤゾノと言所の林中にあり。産靈也。

祭る所三座、應神天皇・神功皇后・玉依姫命
なり。鎮座の年歴詳ならず。

○觀音堂　ヘキゾノ薬師・見沙門もあり。

○石地藏
ミヤゾノ

○村氏に山浦氏三家あり。むかし曾公に供奉
せし者の末裔なりとぞ。天正の頃に山浦清左
衛門と言者あり。清左衛門に男子四人ありし
に、長子ハ慶長の頃長政公召出され、氏を始ハ
りて仲清左衛門と稱し、祿仕し代官を勤めし
か、忠之公の時暇を下され其家絶えぬ。第三
人農業をつとめ今も祖先よりの宅地に居れり。
ヘキゾノ三方に隙あり。前にひろき道ありて
頗堅固なる構なり。



那珂八幡古墳周辺の主な遺跡の位置関係(縮尺1/10,000)



那珂八幡古墳の後円部を東からのぞむ

III. 調査の概要と経過

発掘調査の規模が限定されているため、古墳の墳丘や周溝の規模、更に主体部の位置や構造を把握することに努めたが、住宅地の中にあってトレンチが設定できない箇所もあり、充分に規模を把握し得たとはいえない。

発掘調査は、昭和60年3月12日～7月9日まで実施した。那珂八幡古墳の周開は現在では埋め立てられているが、昭和20年代までは古墳周囲は大きな窪み状を呈していたといわれ、そのために残土又は廃棄物の捨て場となっていた。調査区を設定するにあたっては周辺の地形測量、及び那珂八幡社内の伐採物や廃棄物の処理を優先して行なった。地形、及び墳丘の測量は3月12日から4月初旬まで費した。古墳の北側には住宅が迫っており、トレンチは主に南側に設定し、墳丘、及び周溝規模については7本のトレンチを設定した。又、後円部墳丘では各々のトレンチを延長し、必要に応じて拡張、又はサブトレンチを設定した。後円部のトレンチはA～C、前方部のトレンチはD～Gと呼称し、前方部と後円部のくびれ部や周溝の外周部分にあたるところは拡張して調査を行なった。その結果、墳丘の盛土部分は、後円部墳頂部分を除いては破損を受けていないものの、墳丘裾の地山整形部分や周溝については鎌倉時代以降に改変を受けており、又、戦時中に古墳の周囲に防空濠が数多く設けられているため一部には墳丘の陥落がみられるなど古墳築造時の地山整形の状態は残していない。しかしながら、古墳の裾部南側は溝底の耕作地化のために墳丘裾部を削り取った程度と考えられ、又、北側については住宅化のための削平であるから、古墳の地山整形については大幅な地形の変換には至っていないと思われる。前方部には保育園が所在し、又、墳丘北側のくびれ部から前方部にかけては、八幡社の裏参道がスロープ状に設けられているため前方部は削平を受ける。この保育園と墳丘北側住宅地との間が約1.4mの比高差を有している。又、この部分の地形は北側に対して外湾する形状を呈している。同じことは墳丘南側のくびれ部にもいえ、こうした地形変換の復元を行なうと、從来から云われていた帆立貝式の前方後円墳ではないことが判明した。又、後円部墳丘では2基の主体部を検出したが、2号主体部からは三角縁神獣鏡、及び玉類が出土している。

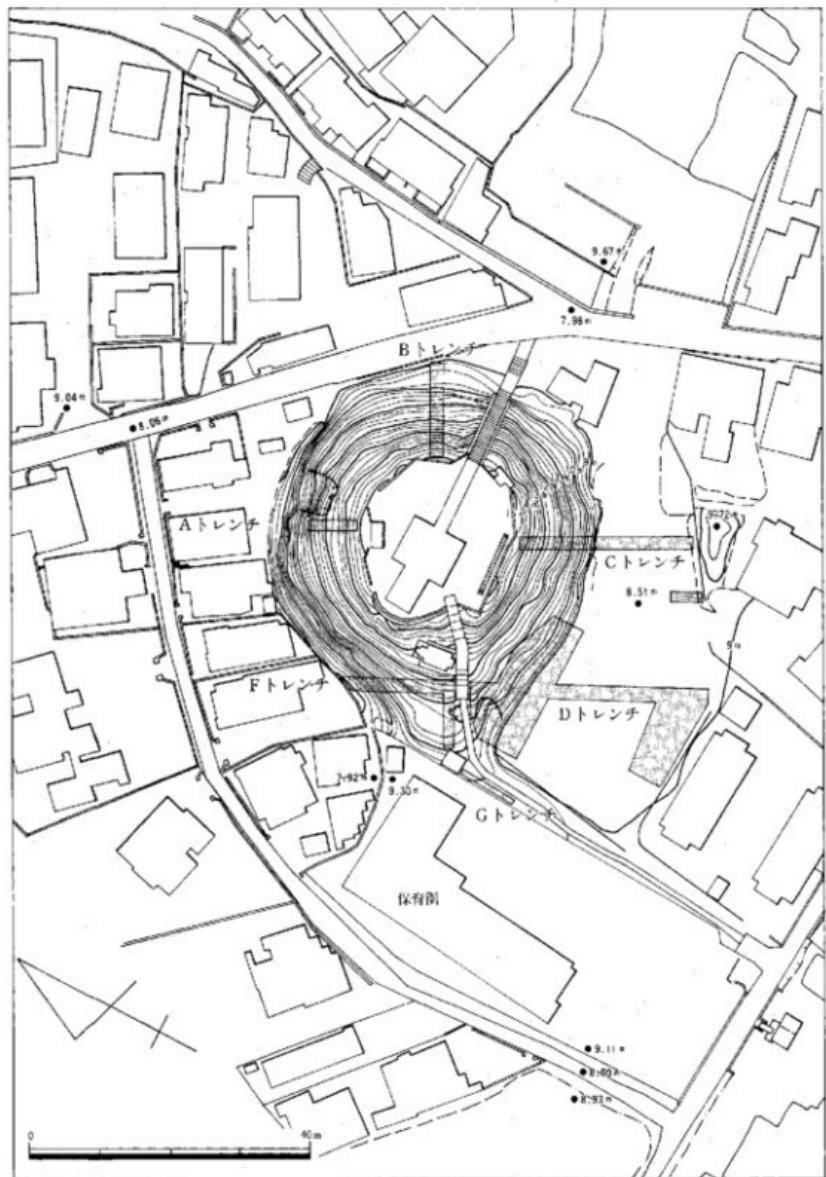
その他の遺構には、墳丘南側の周溝下から弥生時代後期の井戸跡や土壙が、墳丘下の地山整形上からは弥生時代の掘立柱建物、住居跡を検出した。掘立柱建物は柱穴径が80cm前後を測り、4間位の規模をもっている。墳丘南側からは古墳時代後期～奈良時代の甕棺が1基出土した。遺物には弥生時代中期～後期の上器、石庖丁、石斧、砥石、須恵器があるが、古墳のくびれ部周辺や周溝底の包含層からは鎌倉時代の土師器皿、青磁、石鍋、瓦片が出土している。

従来の調査では、円筒埴輪や装飾埴輪片が出土したと云われるが、今回は1点も検出できなかつた。

年次別調査項目

初年度(1984) トランセス設定(業者委託)、墳丘及び、周辺地形測量、残土・廃棄物の処理作業

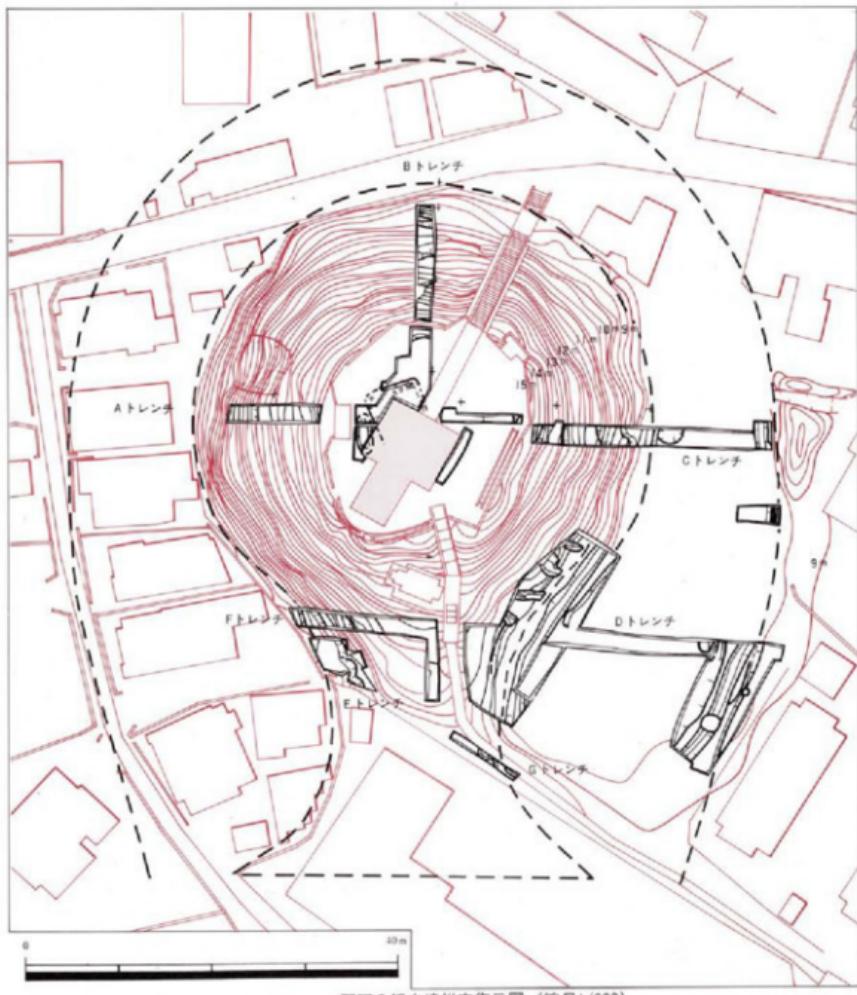
1年度(1985) 前方部・後円部トレンチ設定、発掘作業、埋戻し作業



地形測量図(縮尺1/800)

IV. 墳丘と周溝

先述した通り、墳丘裾部は耕地化や宅地化のため削られており、又、前方部には保育所が建っているため正確な古墳の平面形態は不明である。墳丘は地山整形と盛土で形成されており、盛土の高さは後円部で約5m、前方部で約1.2mを測る。古墳の主軸はN-48°-Eである。地形測量から墳上を復元すると、後円部は正円形に近いが、前方部との境は明瞭でなく、緩やかに変換するくびれ部を形成している。前方部は北側裾部が住宅地のため削られるが、保育園との境



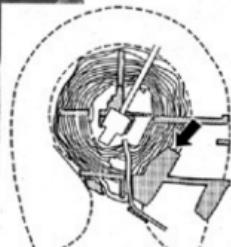
那珂八幡古墳推定復元図（縮尺1/600）

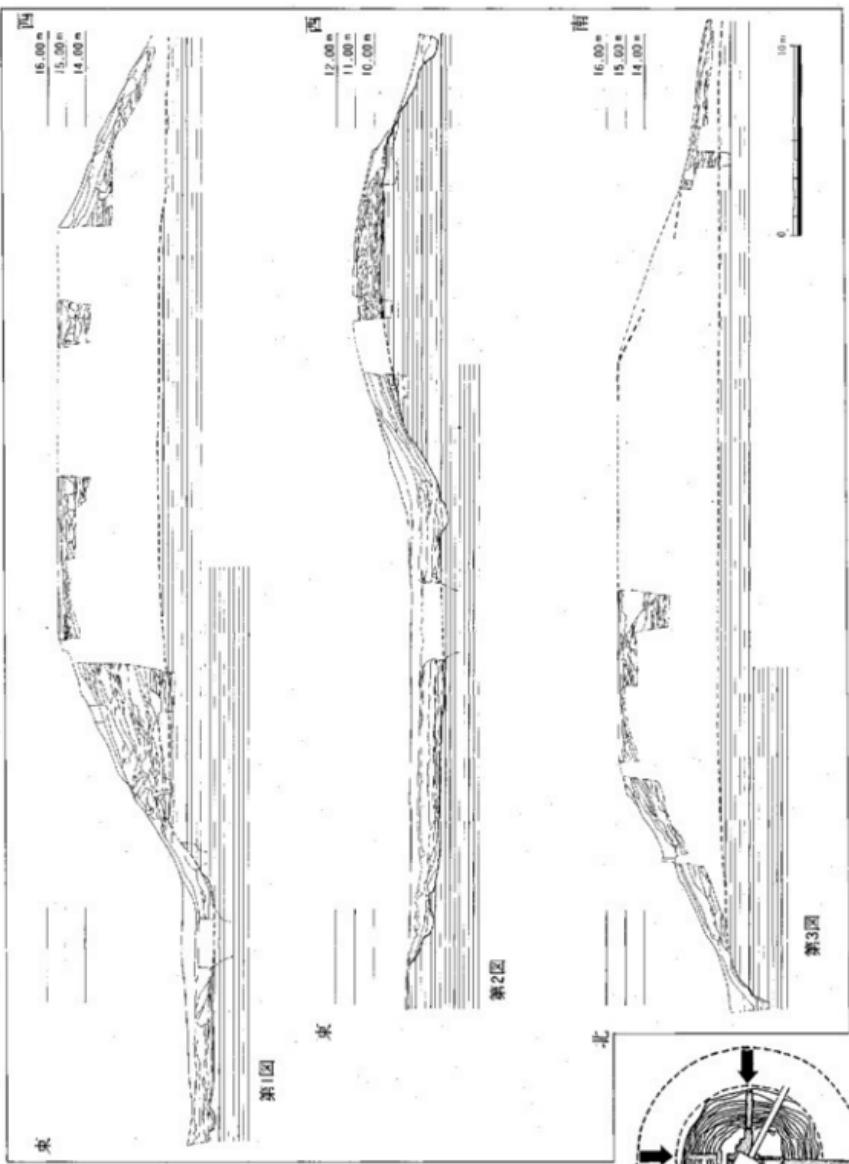
が弧形に外窓する。保育園と北側住宅地の段差は約1.4mを測る。同じく、前方部南側も裾部を巡る近世溝が南側に対して外窓しており、前方部形態は撥形を呈しているものと推定できる。現状での古墳の長さは64mを測り、推定全長は約75mが考えられる。後円部径は約48~50mを測り、後円部の墳頂部は標高15mを測る。現状での周溝底からの比高差は6.5m、前方部との比高差は4.5mを測り、前方部との落差は大きい。後円部と前方部の段差部は神社裏参道のためスロープが付けられており、元の状態は知り得ないが、削平・客土が行われている。くびれ部と前方部の保育園との現状での比高差は約1.4mを測る。周溝底と前方部の比高差は1.9~2.0mを測る。墳丘からの埴輪等の出土はないが、主体部上層より土師器の高杯・器台が出土した。

周溝は鎌倉時代以降の地形変更を受けており、古墳築造時の状態を残しているとは思われない。古墳の南側は耕作地として利用され、北側はかつて蓮池であったといわれる。南側の周溝を見る限り、現状は約1.2~1.4mの深さに客土による埋立が行われている。C・Dトレントでは古墳裾部に近世の地割溝を、トレント南端では鎌倉時代の溝状遺構や近世の溝を検出した。又、トレントの中央部分では客土層下に鎌倉時代の包含層が約10~20cmの厚さで残っていた。C・Dトレントの北側と南側は包含層が削平されている。周辺地形をみると、埋立地と外側地形との比高差は約50cmを測り、南側の一部には周堤状の高まりを残している。以上から、周溝は鎌倉時代以降、現代に至る間に土地利用が重ねられてきた結果、周溝の深さ、外側の溝肩の位置に多少の地形的な変化をもたらしたもの、大幅な改変には至っていないものと判断できる。周溝規模は推定で幅約12~20m、深さ約1mを測り、平面形は盾形を呈するものと思われる。但し、周溝が全周するか否かについては、前方部の形状が明確ではないが、前方部と北西側後背地との比高差が余りないことや、筑前国續風土記では「三方にカラボリあり」というように、元来、前方部の後背に周溝が存在しないことも充分に考えられる。

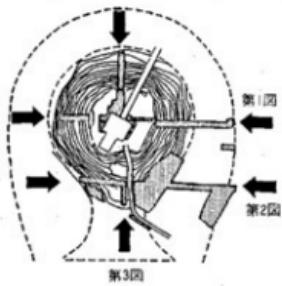


南側くびれ部(南東より)



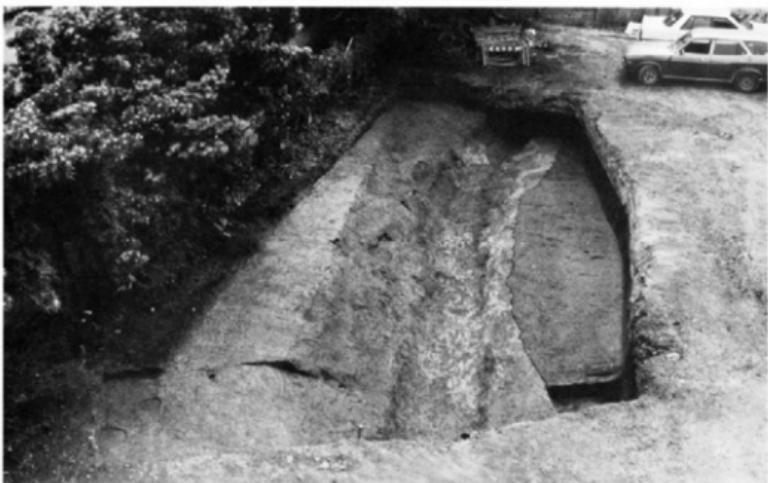
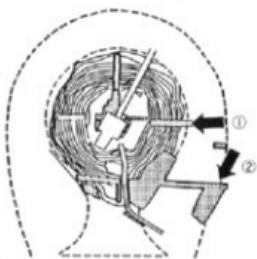


填丘土層断面図（縮尺1/300）





①墳丘盛土の状況
(Cトレンチ北壁)



②古墳南側周溝肩部の状況(東より)

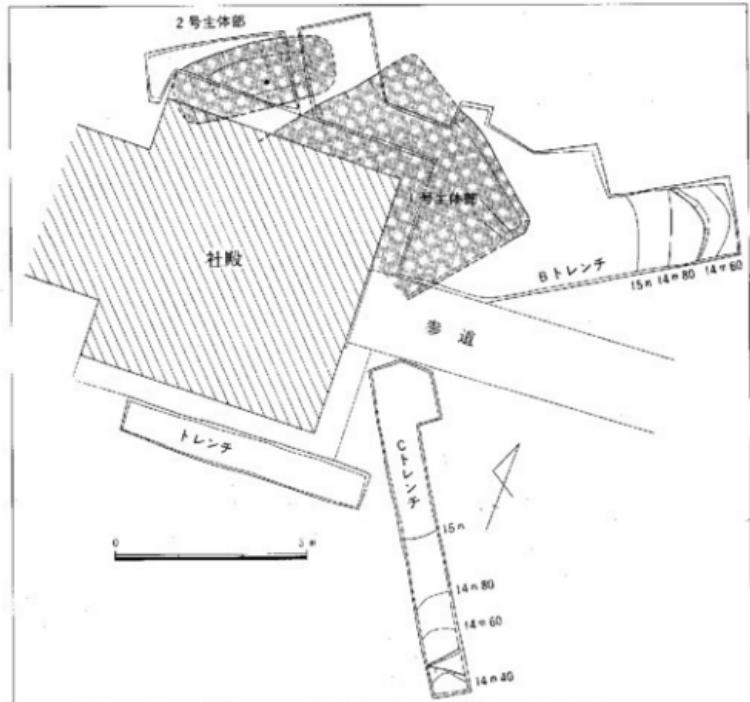
V. 埋葬施設

後円部の墳丘頂部にはA・B・Cの各トレンチを延長し、更に、社殿の南側と北側にサブトレンチを設けた。A・B・Cトレンチの社殿側については拡張し、墓壙の検出に努めた。

主体部は墳丘頂部の社殿の北西側付近にて2基検出した。

1号主体部は拝殿下にあるため規模、構造を明確にできないが、古墳築造時の初葬のものと考えられる。墓壙は隅丸長方形を呈し、主軸はN34°30' Eにある。占墳の主軸に対し、13°30'西へ振っている。墓壙は2段掘りになっており、1段目は土層圓であるかぎり逆梯形を呈するものと思われる。墓壙の壁は灰白色粘土を貼っている。

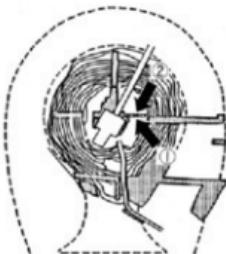
2号主体部は、第1主体部の北側に接して検出した。一部拝殿下にかかるため、全ての形状は確認できない。墓壙は墳丘形成後に設けられており、主体部は木棺墓である。主軸方位はN55° Eである。墓壙は隅丸長方形を呈し、現存長約3.5m、幅約1.5mを測る。木棺は割竹形を呈し、長さ約2.3m、幅約0.6m、深さ約37cmを測る。棺底には赤色顔料が厚く塗布されており、頭部と思われる位置には部分的に朱を検出した。木棺内の南壁、胸部左側に接して三角縁神獸鏡が出土した。玉類は頭部周辺からの出土である。鏡はやや斜めに棺壁に立てかけた状態で、鏡面を表にして出土した。木棺墓上層の整地層からは、土師器の高杯2点、器台1点を検出した。



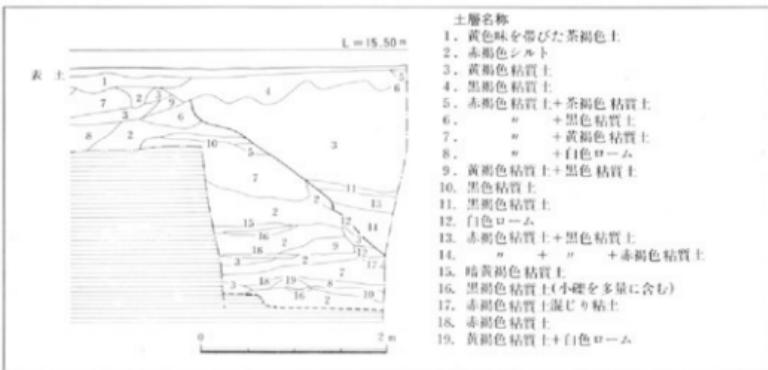
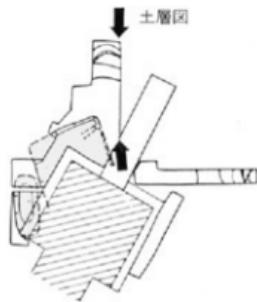
後円部墳頂部のトレンチ配置と主体部位置 (縮尺1/150)



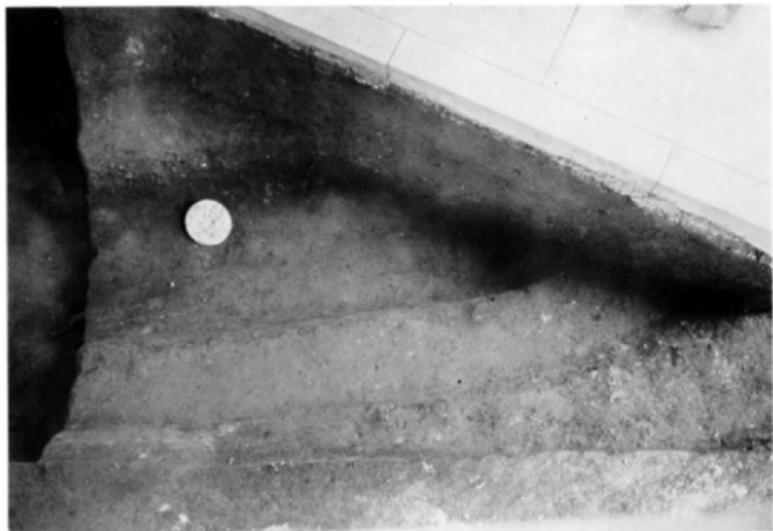
① 填顶部北側トレチ



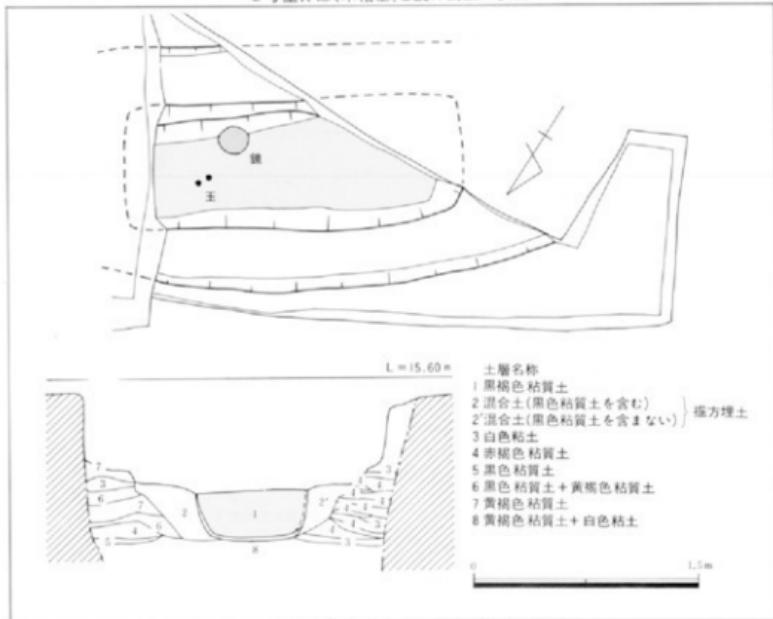
② 填顶部南側トレチ



I号主体部土層断面図（後円部填頂トレチ）(縮尺1/60)



2号主体部(木棺墓)と鏡の出土の状況



2号主体部平面図と断面土層図(縮尺1/40)



2号主体部
割竹形木棺の
木質が残る。



三角縁五神四獸鏡
面径約21.8cm
同范鏡
椿井大塚山古墳
湯追車塚古墳
佐富尾丸山古墳
フーリア美術館

VI. 遺 物

出土した遺物は、古墳に伴うものその他、弥生時代中期～鎌倉時代に亘る土器や石器、陶磁器等を検出した。ここでは古墳にかかる遺物について述べる。

1. 玉類

棺内に首から胸にかけて出土したものである。玉は4点出土しており、硬玉製の勾玉1点、碧玉製の管玉2点、ガラス製小玉1点である。勾玉の長さは約1.9cm、厚さ0.67cmを測る。

2. 鏡

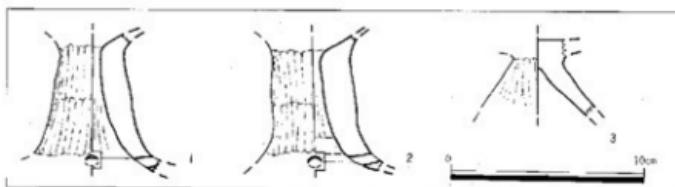
一部にクラックが入り、分離しているが、鏡面径は直径約21.8cmを測る。外区には複線波文帯と鋸歯文を施す。主文は基部に車輪型座のある4個の小孔によって4区分した区画に獸形と神像を並列に配置する。獸形は双獸を1対、神像は1対の双神で、一方の双神の脇には侍仙が添えられている。2神像は正面座像の主神と側面体の脇神、3神像は主神と片方の脇神が正面座像で、他の脇神が側面体で顔を正面に向いている。鉢は円形を呈し、直径3.5cm、高さ1.5cmを測る。獸形は側面体で対向し、顔は正面を向く。又、3個の乳の内側には施飾や傘松形文を配している。鉢孔は一方が幅6mm、厚さ4mm、他方が幅5.5mm、厚さ4mmの大きさで、断面形は長方形である。孔は傘松形文と主神を結ぶ方向に貫通している。鉢孔縁の研磨は施していない。鏡座は円盤の外に12個の梢円形文のある有節重弧文座である。鉢内には紐が残存しており、又、鏡面には綱の布目が残っている。出土状態では鏡の下面には空間が残っていたので、布で包んだ後箱に納められていた可能性もある。

三角縁五神四獸鏡の同范鏡には京都府椿井大塚山古墳、岡山市湯迫車塚古墳、伝奈良市富尾丸山古墳、アメリカ・フーリア美術館の4点がある。

土師器

高杯は3点、器台は1点である。高杯は脚部が2点、杯部が1点である。脚は現存長7.2cmを測り、器壁は厚く、内面は1ヶ所にヘラケズリである。外面は研磨しているが、黒色顔料が塗布されていた形跡がある。杯部とは貼り合せによる接合である。器台は現存高3.6cmを測り、大きく開く脚を有す。脚内外面には赤色顔料が塗布される。

これらの土器は生活遺跡では現在のところは例が無く、祭祀に関わる特殊な土器と考えたい。成形手法等や、杯形態からみて、いわゆる布留式七器併行期の土器と考えられる。



2号主体部の上部、表土内より出土の遺物(縮尺1/3)



① 第2主体部上位出土の土師器
② 第2主体部割竹形木棺内出土の玉類

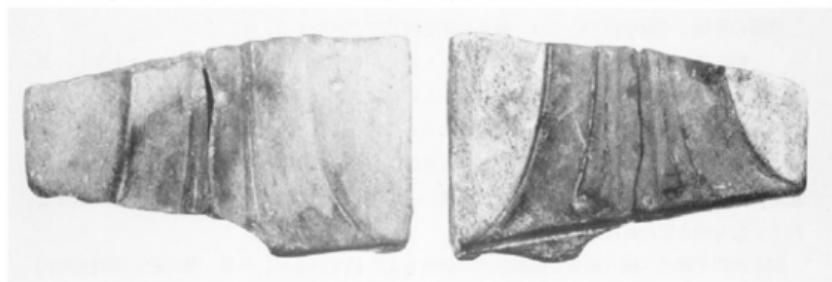
①

②

VII. おわりに

上記のように、那珂八幡古墳の調査成果について概略を記したが、古墳の規模や時期については結論を出すに至っていない。ここではいくつかの問題点をあげ、本報告へ向けて今後の課題としたい。

1. 那珂八幡古墳の墳丘形は、現状推定では橢形を呈しており、箸墓古墳と同形状をとる。筑前においては、御道具山古墳、三国の鼻古墳、津古1号墳なども前方部が橢形を呈しており、最も古い古墳の一群に属している。
2. 周溝は鎌倉時代以降の改変と著しい住宅地化のため不明確であるが、盾形が推定できる。地形上からみて前方部に周溝が巡らない可能性が強く、より古式の形態を示している。
3. 三角縁神獣鏡を副葬する古墳は筑前に多く、西に藤崎遺跡、東に香住ヶ丘古墳、名島古墳、天神森古墳、東南に御領古墳、原口古墳、西南に妙法寺古墳がある。那珂八幡古墳は福岡平野の中央部の那珂台地に立地し、これらの古墳の中心的位置を占める。
4. 古墳の築造時期は土師器からみるかぎり、古墳時代初頭に位置づけられる。但し、これらの土器が初葬時に伴うか否かは今後の調査を待ちたい。



昭和23年発見の中広銅戈鉗型

付編

福岡市博多区那珂八幡古墳出土の銅鏡に付着する織物
及び同じ鏡の鉤孔内に残る纖維束について

京都工芸繊維人名譽教授

布目 順郎

標記古墳の木棺から出た三角縁五神四獸鏡に付着する2種類の織物（第1図）ならびに同じ鏡の鉤孔内に残る纖維束（第2図）について調査したので、ここにその結果を報告する。本木棺の時期は古墳時代前期初頭とされる。

A 織 物

1. 材 質

材質の調査は纖維断面形によった。断面作成にはこれまでと同様バラフィン切片法を適用した。

結果は第3図に示す通りであって、これらの断面形はすべて家蚕のものである。

2. 織り密度と纖維断面計測値による产地推定

出土の綿は第1図にみるように、両者とも平綿であり、その織り密度と纖維断面計測値は第1表に示す通りである。

表の数値をみると、両綿の織り密度は相接近しており、古墳前期の平綿33種類の平均密度41.8×26.1よりもかなり大きな値である。しかし、いまこれを漢代4墓での値（いずれも平均値）と比較すると、4墓のうち最も小さな値を示した馬王堆での 61.1×33.0 よりもさらに小さい。このことから、出土の綿は両方とも日本製とみられる。

次に、纖維断面計測値について漢代4墓のそれ（第2表）と比較（比較は経緯の平均値で行ない、差の有意性検定は省略する）するときは、次のようになる。

鏡面の平綿：完全度については、漢代4墓の値のいずれよりも小さい。断面積のほうは、陽高よりも大きく、楽浪、馬王堆、ノイン・ウラでの値のいずれよりも小さい。陽高と楽浪の間の値であるが、どちらかといえば楽浪のほうに近い。

鏡縁の平綿：完全度については、鏡面の綿と同じことがいえる。

断面積については、陽高、楽浪よりも大きく、馬王堆、ノイン・ウラよりは小さい。楽浪と馬王堆の間の値であるが、どちらかといえば楽浪のほうに近い。

両平綿の完全度がともに漢代4墓での値よりも小さいことは、それらの材料糸が日本産であることをあらわしている。断面積からみると、それらの纖維を産出した蚕がともに楽浪系蚕品種、すなわち二眠蚕であった可能性が濃い。当時、出土地のあたりでその種の蚕が飼育されていたものと思われる。

出土の両平綿は、織り密度も纖維断面計測値もよく似ているが、外見、特に色と織物面の凹

凸の様子に違いが認められることから、別物として扱った。

B 鏡の鈕孔内に残る繊維束について

標記の繊維束は無然である。その片方の端が1cm余り孔の外に出ているが、反対側の端は孔内にある（第2図）。繊維束の色は、一部は銅錆によって緑青色になっているが、大部分は白色である。

材質を調べるためにあたって、まず繊維断面形を調べることにした。断面作成は從来通りバラフイン切片法による。結果は第4図にみるように、髓腔をもつ細長い断面が多く、細胞壁の断面には放射状亀裂がみられる。これは苧麻を想わせるものである。

この繊維束がかなりの弾力性を残していることから、twist test を数回試みたところ、いずれの場合も約1回転半（約540°）程度の時計回り転回を示した。これで、苧麻であることが確実となった。

終りに、本調査の機会を与えられた福岡市教育委員会に感謝する。

文献 註1 布目鹿郎「養蚕の起源と古代絲」雄山閣、1979

第1表 那珂八幡古墳出土の三角縁五神四獸鏡に付着する平綱の繊維断面計測値と織り密度

資 料	絹綿 の別	色	繊維断面についての計測値			織糸数 (対1cm)	織糸数と 横糸数の比	織糸の巾 (mm)
			完全度(%)	面積(μ²)	供試繊 綿の数			
鏡面に付着する平綱	絹	白緑	47.3±3.27	53.0±5.65	30	50	1.43	1.70-2.80
	絲	・	42.5±3.46	40.3±5.09	22	35		2.00-2.50
鏡縁に付着する平綱	絹	濃緑	47.2±2.38	54.0±5.06	33	50	1.67	2.00-2.30
	絲	・	43.7±3.45	46.1±4.72	30	30		-

備考 鏡は木棺内にあったもの。時期は古墳時代前期初頭。

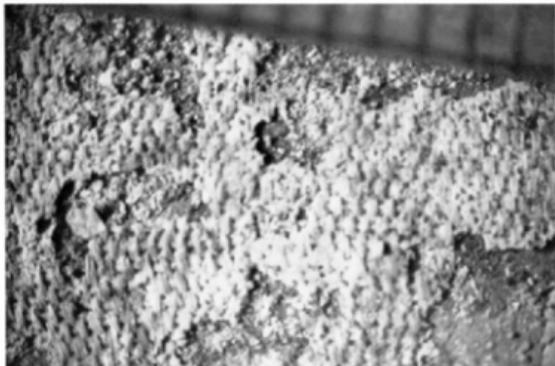
第2表 漢代の平綱における繊維断面計測値

通 論 名	繊維横断面についての計測値	
	完全度(%)	面積(μ²)
臨高県(山西省)	50.9 (10)	37.1 (10)
楽 滋	50.8 (23)	49.8 (23)
馬 王 墓 1 号	— [53.9]	65.5 [69.8] (5)
ノイン・ウラ	53.9 (20)	73.0 (20)
バ ル ミ ラ	—	—

備考 (1) 馬王堆の羽織横断面計測値は『考古学報』(1974年第1期)にあるもの(ただし、〔 〕内の数値は筆者が同書に示された繊維横断面写真をもとに算出したもの。)

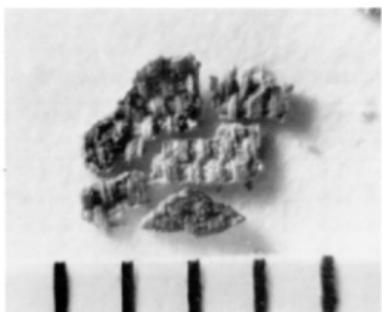
(2) 本表の数値にはマツタでのものは含まれていない。

(3) ()内の値は資料数。



那珂八幡古墳出土の平鉈
scale: いずれも1mm

第1図A 鏡面に付着する平鉈



第1図B その一部拡大

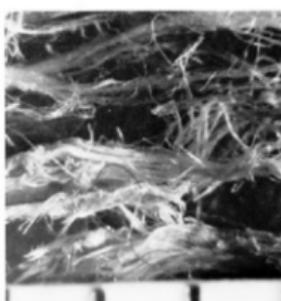


第1図C 鏡縁に付着する平鉈

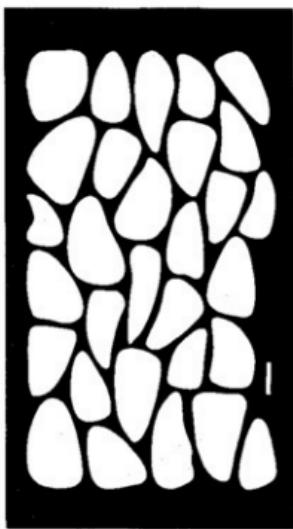


第2図 鏡の鉋孔内に残る纖維束

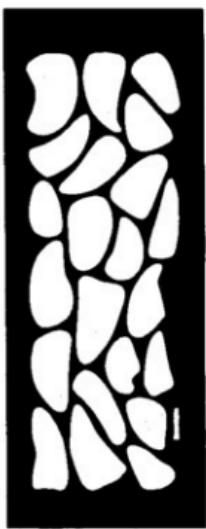
A 纖維束が鉋孔から出ている状態



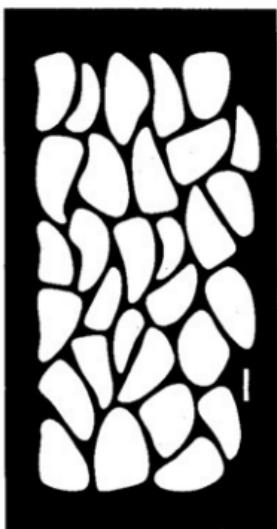
第2図B その一部拡大



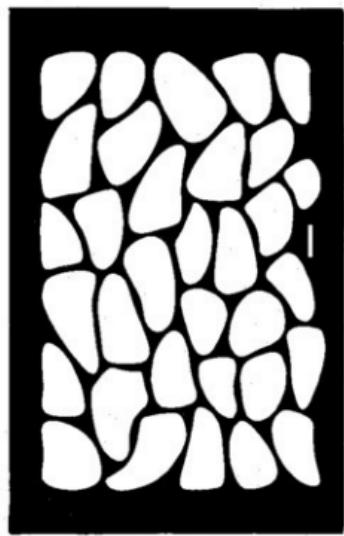
第3図A 鏡面の平継の経糸



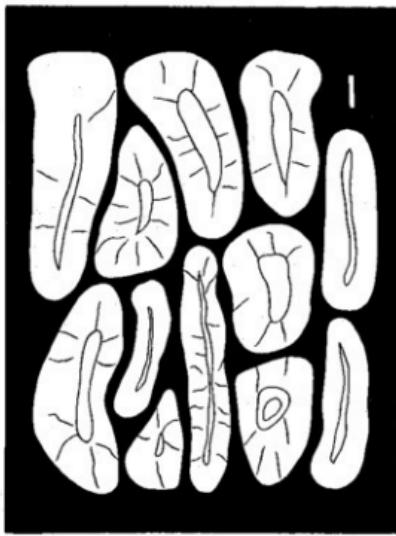
第3図B 同じ平継の緯糸



第3図D 同じ平継の緯糸



第3図C 鏡面の平継の経糸



第4図

第3図 出土の平継の織維断面転写図(個々の断面転写図を無秩序に並べたもの)
scale: いずれも 5μ

第4図 糸の縫孔内に残る織維束の織維断面転写図(個々の断面転写図を無秩序に並べたもの)



那珂八幡周辺航空写真

福岡市埋蔵文化財調査報告書第141集

那珂八幡古墳

昭和59・60年度の重要遺跡確認調査及び緊急調査機報
1986年3月31日

発行 福岡市教育委員会
(福岡市中央区天神1-7-23)

印刷 福博綜合印刷株式会社